23　文化十三年『花供養』　2014/07/22

底本　白鹿
校異　月明

花供養

（題簽・表紙）

（表紙見返し）

みつの都はさらなり、
あし曳の山陰や漁する
浦島まで、はせを葉のかげ
応なりて、西も東も□る
花は八重一重、白くれなゐの
色々、南無庵の園生にかむばし

序一オ

是此花の集れるや。蒼師の跡
厚きに帰するものから、
文化丙子晩春中二日の供養
なれり

くるめ　芦月書

暁がたの闇につかえる桜かな　文常

池へはれ行はる雨の音　蒼虬

燕に煙草の縄を解かけて　木海

家あづけたる人を呼也　雪雄

篠竹の道を細につきはじめ　梅價

鯲の笊にみゆる露しも　十壺

月のことといはぬ時分に夜の直り　月峰

鸚鵡もひとり秋風を鳴　芙九

一才

足元へころりと鈴の落かゝり　布雪
　けさの夢にも越のあら海　真菅
蚤ひとつ蕗の広葉に取放し　金菜
　榎の下の寮もふさがる　翠節
かさ／＼と天気に成し紙合羽　五芳
　あとの市から遊女さまよふ　茂椎
箸とりに立も夜空の様子也　双南
　松をもてなす片はれの月　岱李
霧の吹時も出たがる神の馬　陶居

一ウ

ふらついて居る伊豆の石工　国雄
朴の葉を汁のうかしに放り込み　漢水
行灯ふんで巣に帰る鳥　白糸
御局をこひしがらるゝ花咲て　百池

【注】月明・中七「こひ／／かゝる」。

山のかげさす雛の横顔　其成
雨ふれば釣の草臥出る也　あたふ
呉羽参りに垣をぬかるゝ　千崖

右一順　下略

二オ

戊年　一順

人声のさくら放るゝ月夜哉　杜蓼
門にたておく春の塩柴　蒼虬
俎板にいまゝで動く鱒乗セて　梅價
翌の下行の銭はこぶ也　布雪
此度は機嫌に叶ふ船の形　雪雄
何処やらにあるさるとりのはな　金菜
村雨の庵に兀たる会津椀　月峰
古川を鵜の朝廻りする　真菅

二ウ

旅人の藁を焚るゝ道の傍　十壺
くにとも鍛冶の師走めかるゝ　其阜
いつの夜も星の明りを顔に見て　素童
管弦のあとは松風のふく　国雄
追／＼に筏を下す口があき　其成
傘さへ祖父のすぼめ兼つる　岱李
金沢の文庫見に来る秋に成　魚辰
けふの様子は河鹿計也　芦涯
おみなへしうつむく方に残る月　白糸
三才

堀はふるほど多き赤土　双南
黙阿みが夢に知りたる革衣　百丸
雨を占ふ土竈の燃口　竹彦
上京に此頃花の客となり　百池
小魚の匂ひ鼻につかえる　漢水

亥年　一順

水おとやおくの桜の見ゆる迄　金菜
夕日の中に鸛囀　得終
三ウ

干蕪戸さゝぬ窓のあしらひに　瓜坊

油売より来る人はなし　百池

着る度に菅の小笠の唯匂ヒ　月峰

風に渚の濁りつく也　真菅

きのふから月に成たる宵のうち　百哺

並べし椀に移る梶の葉　岱李

蜻蛉の羽に競るたもとにて　雪雄

山掃おろす朝の骨折　梅價

酢漿草に畳るゝ雨の音もなし　国雄

四才

枕の伽にたゝす小人形　杜蓼
夢にまで有馬の事を謂つゞけ　士明
ほしき所にはえしなよ竹　素章
傘を適／＼させばおもしろき　馬当
柴折宿ははちたゝき也　来車
夕月に光らぬ苞の塩いわし　五芳
今のる舟の棹の白露　布雪
みそ萩のはや咲過し様子にて　孤松
木を伐音の響く北さが　白糸
四ウ

子年　　表

夕桜鳥の林と成にけり　十壺
霞かさなる山のうね／／　千崖
一舎り蕨煮香の身に付て　雪雄
簣に水を打かけて置　布雪
下駄の緒にたしなき級を遣ひ捨　月峰
鰍盛りのみゆる赤雲　杜蓼
苅残す草にも月のかくすらん　周泰
節句もしらぬ露の散やう　金菜

五才

草の戸の米喰尽すさくら哉　肥後
苗代に影さす岡の桜かな　〃　眠石
水桶に松の雫よ春の月　〃　三千丸
有明の松のふとさよ雉子の声　〃　春暁
何となく登れば高し春の山　〃　無垢宇
鶯の声すくい行あらし哉　〃　葭月
ひとつ宛散や桜に昼の鐘　〃　蛤台
おもふこと流れて行ぞ春の水　〃　漱石
陽炎や岸の上なるはな堇　〃　汀雨
　月鶴
五ウ

落椿二日の雨を溢しけり　丶　秀丸
灯ともしよまて今しばし夕桜　丶　潭月
焼野原浅くも春を見る事よ　丶　車夫

能き家は五加木がないぞ春の旅　熊本軸麿
　霜に別るゝ明のしづかさ　恕風
童の小鮎売来る浦泙に　菫戸

　幾ところにも財（ママ）木を積　蟻城
月影の古き莚になは／／と　仙斧

六オ

こゝろ／＼の瓢並べる　以正
そゝぎたる秋の狭衣取入て　車夫
雨によろこぶ恋もある哉　尺菊
こゝらより京へ三里は草の道　壬辰
きのふの墨を流す椽先　慶遊
遷仏の近うなるぞと雀啼　蒲丈
曇りが晴て茄子出初る　千甲
右　一順

六ウ

若ものがかたげて通る山桜　肥前諫早文州
夜の明る春がある也蜑が家　〃　走烏
夜さら／＼蛙の声に月もなし　〃　桑我
日も雨も少しはほしや菫草　〃　津画
春の風只居る人はなかりけり　〃　詞英
陽炎や苦もなく粟をかしぐ音　〃　孤石
しり顔の人の多さよ春の里　〃　梅路
何しても心に足らぬ春日哉　〃　淇桃
一棹に舟を渡して春の月　〃　春里

七才

梅白し一里夜に入る奈良の里　肥前神代霞林
皿鉢に春は行也道の家　〃　春喬

宮嶋にて

宮嶋や鹿も交りて貝拾ひ　〃　亀泉
足袋の緒のひとり解るよ花菫　〃　島原石鼎
山鳥は朝／＼見へて春の水　〃　振鷺
よき家の磯に見ゆるぞ春の月　〃　蒼翠
春風や道の付たる背戸の畑　〃　諫早梅江
鶴四五羽春の月夜と成にけり　〃　炉扇
燃て居る火にも汐さす春べ哉　〃　方居

七ウ

寄る浪も上にも乗らず春の月　　、　斎巳

【注】月明・上五「寄る浪の」。

雉子鳴や心の外の草枕　　、　時習

蝶／＼や朝から絶へぬ人通り　　、　春芦

君が代の陽中に出る田打哉　　、　澧波

鶯や杉の実植は川のはた　　、長崎祥禾

徒に蛙もなくや花ざかり　　、　恕交

　薦敷かけよ鈴菜酒の代　　鞍風

朧月人の心にうつるらん　　、

八才

肩を並べて運ぶ酒樽　交
濡椽のはしから夏のせめ寄せて　丶
あさな／＼の嚮も仕舞はず　風
手を打ば舟のもの等も手を叩キ　丶
つくねた髪に雨のばらつく　交
殺されし夢の終りのなくなりて　風
錦のうへに落る鈴むし　交
白露の太刀の鞘を引掴ミ　風
月をうしろに黒米を烹ル　交

八ウ

須磨寺は空家に似たる戸の透間　風

鼠の穴へ水を掃こむ　交

竹を見て居れば昼寝の種と成　風

桜に添うて消る佐保姫　交

春寒く小袖の袖のせまければ　風

初にちかき味噌の生馴　交

夕暮の隅から人を突出し　丶

草鞋片足の捨処なき　風

木枯に銭取橋もあるものを　交

九才

腹をへらしに瓢なぶるか　風
憂事のいくらも溜る竈の前　交
蜜の匂ひのせんかたもなし　風
郭公しらぬ男が召出され　交
清水乏しき歌の中山　風
村雨の中に太鼓を舁居へて　交
宮の屋根茸秋は来にけり　風
借り来る酢壺も月の間に合せ　交
押へて置ば延る京萩　風

九ウ

楽焼の土のねばりの嬉しさに　丶
　音計きく浪の終夜　交
松前は垣よりしたに店を張り　丶
　花の雪吹の雪吹もて来る　風
さつぱりとくれてやつたる葩袋　丶
　けふも暮行万代のはる　執筆

山里は春めかねども田螺哉　豊後臼杵南溟
蝶よりも静に成ぬ遅桜　丶日田　魚舌

一〇オ

山ざとや垣にもかゝる朝霞　豊前中津　吐屑
春の夜の浅く更たり蜆汁　〃　山国　青城
嘘の二つも三つもはつざくら　〃　宇佐　芦江
鳥の踏余寒やしばし藪の音　〃　大里　其峰

花の友すくなきものと思ひけり　筑后久留米沙明
詩をよんで登る人あり花の山　〃　完慶
おもしろき世帯也けり花の宿　〃　奇明
花の山夕べは秋の来る計り　〃　芦月

一〇ウ

蜑の子の小海老取也花明り　　丶　寒岳
朧夜や湖水の浪を膝の前　　丶　襲明
いつの年もおなじ柳を家の前　　丶　風歌

帰る雁是ほど常は見ざりけり　　筑前博多南礎
しら魚やけふも命の美しき　　丶直方沙牧
のどかさやうしろ見せたる小田の雁　　丶小竹柳左
山ざくら翌日も思はず歩行けり　　丶須恵雲平
おしまげし枝から咲や梅の花　　丶山鹿瑞之

一一オ

我庵も隣ありけり夕ざくら　　丶磯光　嵐二
梅がゝやほどなく見ゆる家一つ　　丶　　辰風

鶯の雨にもぬれぬ林かな　　周防佐山其雪
窓にもる影まで深し梅の月　　丶櫛浜　若葉
人馴て花守の子の並びけり　　丶白松　和道
いさゝかのけぶり立けり小野の梅　　丶　　不占
野をへだつ隣むつまし春の雨　　丶潟上　柳之
春の山火燵仕舞ば膝の上　　丶上ノ関終屋

一一ウ

雪どけや浪花は多き橋の数　〃　南霞
薄雲の桜にかゝる夜明かな　〃　事白

すきかへす花の雫や吉野紙　長門下ノ関　己酔
春といふ隣の出来て一つ家　〃　羽尺
華の外に休む心やよしの山　〃　花休

花の香は小ぐらき月の夜頃哉　大隅　雪橋
花に寝る日のあり雨の小半日　〃　金鼠
一二才

花の夜や響き定る城の鐘　〃　加次木　春波
細窓に月のはさまる花の宿　〃　長庵

蝶鳥を動かす花の供養哉　〃　其鹿
都のひがし山霞む内　冬日
畠打の心やすげに欠伸して　雪橋
隣の馬のもの喰をまつ　暁霞
笹の露いくらも走る月影に　金鼠
秋のながめの鐘に乱るゝ　春波

一二ウ

宿かりて乾キつきたる袷時　鹿
　伊勢と尾張の間の汐風　橋
傘にあられの溜る身を忍び　霞
　南の角の白粉を買ふ　鼠
何事も医者の言葉を力草　日

【注】月明・上五「何事の」。

　月の戸さして過る此秋　波
菊の香のほのかに寒き朝夕　鹿
　露を運ぶか車街道　橋
脇差の風に吹るゝ草履取　霞

一三オ

柳たれたる地うたひの明　日

酔顔も二八の春のすだれ越　鼠

なぶられ廻る湯女の出代　波

から臼を挽を力の親持て　鹿

寺の障子をやつと張とる　橋

待合に紙衣の音や木葉吹　霞

今ぞ恨の縞ひと筋　鼠

月／＼の八幡参りを怠らず　日

油灯光る家の賑ひ　波

一三ウ

松影に涼風をまつ腰延て　鹿
　かゝしの笠に雨のぱらつく　橋
太／〻／＼とことしのそばを切出し　霞
　五位も六位も月に閑し　鼠
雲ならで塵焼けぶり東より　波
　大魚二つ舟に活おく　鹿
一チ時におなじ病のふるひ出ス　日
　花ちり初る彼岸中日　橋
漬ものゝ色香も春になれ合て　霞

一四オ

鶯とりの戻る声／〻／　　鼠

【注】月明・上七「鶯鳥」。

うつゝにも寝覚世話しき旅衣　　波

　滝を心の歌枕して　　日

散までは散とおもはで花見哉　　日向美々津吟竜

【注】月明・作者名「吟篭」。

谷／〻／のひとへに見ゆる桜哉　　〃　女　つる

寒けれど心よげ也春の風　　〃　　蝸牛

寝に来る犬も飛のく柳かな　　〃　　壺両

片枝は水に流るゝ柳かな　　〃　　龍雨

一四ウ

仰向て手を置ば見ゆる雲雀哉　丶　風之
錆のある噺も出たり春の雨　丶　女　梅枝
語り合友を得にけり花の頃　丶　龍水
青柳のあたりに結ぶ庵哉　丶　里暁
梅がゝをしとふて行ば野寺哉　丶　吟風
鶯の初音やすらん薄霞　丶　高鍋　蜋斧
薄暮や雁の別るゝ浦の松　丶　網島　兎扇

取付て息をつく木も桜かな　サツマ鹿児島梅隠
一五才

三日月や寝ての噺も花の事　伊よ今治素橋
あまり咲てさびしき花の盛哉　〃　素朗
すいらしき赤前だれや春のかぜ　〃　一草
晦日の闇にも梅は月ごゝろ　〃　春台
散さくら日和に癖はなかりけり　〃　二江
精進の酒に酔けりはつざくら　〃　里教
花の山白雲に乗る心かな　〃　一翠
道見えぬほどまで桜散に鳧　〃　百翠
ぬる〳〵と水に伸たる柳哉　〃　イ長

一五ウ

夜明りの桜に届く小家かな　　〃　都橋
大松の陰に一木の花ぐもり　　〃　芦川
初ざくら朔日ほどの朝朗　　〃　亀碩

舟曳の踏行隙や芦の角　　サヌキうたづ風朝
春の雪／／とて朝寝哉　　〃　南之
長閑さの戸口と成ぬ山の家　　〃　風尚
よきほどに遊んで暮る汐干哉　　〃　一濤
ひら凪や接木養ふ夜のしめり　　〃仁尾宗徳
一六才

水鳥の雫こぼれて草萌る　丶仁尾　古桃
生竹の枝より暮て春の月　丶引田　春耕
奥ふかう花散夜也曇空　丶　芦舟
草道の月夜も捨ず春の人　丶　李風
行程に花はあとちる山路哉　丶　幾久里
夜の気の放れ際也雉子声　丶　移山
散花に流るゝ水をおしみけり　丶　麦飯
ちる花の扇に帖みこまれけり　丶　泗来

一六ウ

植てから隣したしき柳かな　アハ小松島慮一
草臥て寝る過分さよ花の中　〃　徳島一路

甲斐が根や富士にも逢ず春の暮　淡路江井桃堂
ひや／＼と苔ふむ花の木間かな　〃　民古
月落て花に木の間のなかりけり　〃松帆　冬柱
花の戸にかさ／＼歩行家鴨かな　〃草加　李長
春の夜のどこまで往ても小松原　〃　里鶴
屠蘇の香のしらぬ思ひや梅花　〃　梅秀
一七才

行程の処が桜／＼かな　　〃　岳龍
一癖もなくては寝まじ花の陰　　〃　湊　大麓
花に来て居ても浮世の鐘が鳴　　〃　方壺
分別もなき小家也桃の花　　三津浦晋阿
鞍置て魁したり初ざくら　　〃　柳化
よしの山花によごれぬ道もなし　　〃　藍水
捨ものを尋に来たり桃の花　　〃　玉鳴
盗人といはれても折桜かな　　〃　左来
春の浜べ人そこ爰に日の暮る　　〃　須本其秀

一七ウ

川風に吹あてられて梅の花　　播磨三木美岳
あさざくら出て行鳥に曇けり　　〃　梅旭
折／＼はさくらに戻る嵐かな　　〃　其川
草麦や軒に離れぬ春の月　　〃　露洲
角たゝぬ夜とは成けり春の月　　〃　翠梧
【注】月明・上五「角たゝく」。
家ごとによい酒持て桃の花　　〃　文卿

雨の花さのみもろくも散ざりし　　〃　米花
　春を見とめる磯の海松房　　千崖
一八才

帰る雁人の寝覚を声懸て　梅旭
竹のうしろへかはす小灯　花
水縄にひけて落たる山の月　崖
秋の行ゑのより所なき　旭
しら露の中に螺吹修験達　花
昼さへ眠る三輪の松杉　崖
鷺去ずうちにさめたる舟の飯　旭
たゝんで人に渡すさむしろ　花
雨の漏庵は時雨の疾降て　崖

一八ウ

ちぎれる様にかゆき耳たぶ　旭

とう／＼と鞴はやめる月の声　花

流どまりのしれぬ川霧　崖

何一木外の樹のなき柿畑　旭

あたま計をかくすからかさ　花

絵ぶみせし跡の思ひを捨兼て　崖

心に寒き園の若草　旭

あながちに降とも見えず春の雨　広峰

梅羊

一九才

雨の戸や五形は誰か思ひ草　備后尾道蔵六
山ざくらあまりに道の広過ル　〃　南路
曙の春よしばしは人も来ず　〃　東翠
春の夜や三井の御児の夢心　〃　鶴江
渡らずに濟川渡る桜かな　三原　茶隠
花の夜を垣間見に出る都哉　〃　素鶴
山ずみや居ながら花に取まかれ　〃庄原　花雀
凧三日月低ふ出たりけり　〃田房　桃甫

一九ウ

ふんぎつて麓の花に戻りけり　備前　鷺雪

【注】　二五丁表に、下五「帰りけり」とした同句・同作者の句あり。

一日は男世帯や山ざくら　〃　香登　孤松

【注】月明・中七「男帯也」。

桃に灯を置や延喜の夜のさま　安芸広島　篤老

鐘なりて寺と見上る霞かな　石州池田　秋里

鳥の寝る水は動て春の月　〃　浜原　吾風

水長うながるゝ梅の盛哉　〃　失上　梨雪

来よ〳〵と鳥は鳴かも春の山　〃　紫雲

二〇オ

暮行やおなじ宿りに花の友　出雲大社　扇風
花盛うかるゝ様になく蛙　〃　路鳥
散咲や桙の鳥井朽ながら　〃　里信
佐保姫の笑顔なるらん夕気色　〃　四川
夜ざくらや思案極て啼鳥　〃　馬嘶
山ざくら只大やうに咲にけり　〃　有秀
気短に朝ちる庵の桜かな　〃　浦安

春の夜のうつゝを花の木の間哉　伯州米子草台

二〇ウ

どれ／＼が啼勝たやら朝蛙　　大眉
音のしてちらば寝てみん花の中　　南岳
二人来て中よく売し若な哉　　亜水
散花に初音のかゝる山路かな　　美鶴
枕する方を定る弥生かな　　雨村
水筋の長かれ梅にさす小舟　　羅堂
初花やその日帰りも旅の中　　思考
風筋は鳥も並ばず春の海　　習風
梅さくや此比人の夜が見ゆる　　嵐水

二一オ

錠おろす水流れけり桜陰　因州鳥取　阿蘭
はつ／＼にかゝるや岨の梅の月　〃　南溟
雪解や畑をもたぬ家もなし　〃　孤睡
戸口から春の山也草の庵　〃　亀睡
山住や戸の明たてに梅の散　〃　樫姿
人の来る序にも散門ざくら　〃　扇流
啼捨て雉子も眠るや松の陰　〃　宋真
湖や鳴も啼ぬも帰る雁　〃　少年　好之
しら魚の美し過て春寒し　〃　湖流

二二ウ

如月や一足出ても草の上　良子
夜すがらや蛙の声のかれもせず　大方
海川に影を置也春の山　雌鵲
乙鳥はぬくひ鳥也初桜　月丸
しら鷺の氷踏割春日哉　魯雲
雨三日都に出ても日の長し　羅風
つゝじ折子供の下を雉子のこえ　無三
水ぬるむ川上青し山の色　画石
藪入をしても聞也初瀬の鐘　竹室

二二オ

長閑さの流そめたり隅田川　鬼孫
山の井の水はふへたり遅桜　雷師

折り口のつく旦より梅の華　南嶺
　草に踏出す水の陽炎　南溟
春先の土にも逢はぬ鍬提て　〃
　籮の小海老のぱら／＼と飛　嶺
さしかゝる月に冷き銭の露　〃
　秋にもたるゝ酒の醒際　溟

二三ウ

木犀の花の匂ひも広がりて　丶
　岨の高みに移す萱堂　嶺
ひたすらに古井の訳を聞たがり　溟
　戸ぼその風にしばし手を置　嶺
宵啼の鶏も思ひのありそうに　溟
　莚の塵を波に突やる　嶺
朔日の雪の明りを酢に当て　丶
　先づ東を見せる馬の子　溟
唇の薄き弟に世を譲り　嶺

二三才

いづれを花の隠笠にや　　溟
甲斐が根の月も弥生と移る空　　嶺
鶴と雁とが引添ふて行　　溟

鶯の越せば濁るよ糺川　　村之
酒呑の顔照る花の夕日かな　　百茂
人の気のさめて夜散桜哉　　兌籟
初ざくらおよそ／＼の昼の鐘　　李謙
散うへに夕べの見ゆる桜かな　　半兎

二三ウ

昼からの汐干になるゝ小鳥哉　因若桜桃涯
町中に寺のある也花曇　〃　木鶏

【注】月明・中七「華のある也」。

山彦の山動かすや朧月　〃　今志
横町に藪入の人見えにけり　〃　李下
有明の月よりふえて散桜　〃女　兎遊
大風の木の間に見ゆる胡蝶哉　〃女　至白
けふもまた桜に暮る山路哉　〃女　梅枝
きさらぎや十日も過て春の雨　〃　如雪
花に行人を見に出る在郷哉　〃　浅掲

二四オ

草臥し雀の声ぞ春の風　　〃　及師
永き日の昼からも咲菫哉　　〃　孤松
赤椿落も果さず暮にけり　　〃　孤月
梅咲やしよろ〳〵川の水煙　　〃　可龍

兀山や片日渡りて雉子の声　　作州江見桃蹊
山寺や出つ入つ花に二十日ほど　　〃　独醒
心なき身也花の夜只更る　　〃　花調
冬からの出おしみも出るねはん哉　　〃　鸝友

二四ウ

雉子鳴て花少し散小昼哉　　〃　如休
ふんぎつて梓の花に帰りけり　　〃　倉敷　鷺雪
【注】二〇丁表に同句あり。
あらためて言事多し梅の花　　〃　雲子
春の雪傘より上に降にけり　　〃　徳水

湯の銭を忘れて出たり朧月　　但馬浜坂藍尾
草臥て寝たか爰にも春の犬　　〃　勒居
鳶の輪をかける菫の日和かな　　〃　二方　月波
如月や木の焚さしの炉にたまる　　〃　和田山月波

二五オ

一しきり動て暮るさくら哉　大養父　鳳兮
鶯や偽りらしき莚おり　〃　岸輅
蜂一羽たすけて清し手水鉢　〃七味郡呉柳
【注】月明・上五「蝶一羽」。
旅人となればねむたし赤椿　〃　手辺竺仙
引ずりて若草よごす柳かな　畠山　耕雲
片枝は有明残るさくら哉　女　ゆう

曙の目に癖づくや東山　〃　一貫
庵は筧の音のあたゝか　蒼虬

二五ウ

やどり木の桜小早く葉を見せて　　丶
　春の烏の人ちかう飛ぶ　　貫
月の影田に縄網を引廻し　　丶
　旅して戻る夜から稲妻　　虬

菜の花やもの喰倦し鳥の顔　　丹后田辺蕪良
面白き夜の小口から咲桜　　丶　　汶水
叮嚀に鶏のうたふて懸莚　　丶　　桃之
華さくら人も仏に成といふ　　丶　　桃月

二六才

影置て行か汐干に去ル雁　丶宮津　魚道
畠打や宮の梟の昼もなく　丶　青馬
目の届く程は人ちる汐干哉　丶　其景
人の地とひとつに咲や山つゝじ　丶　呉律
網提て川べに暮る椿かな　丶　松居
芦の家は汐につかえて夕桜　丶　柳絮
祖父が世をけふは聞日ぞ梅の花　丶大島　春湖
ちる花に埋まれて一夜夢見ばや　丶岩屋　江南
人に飽風情も見ゆれ夜の桜　丶河守　弥芳
一二六ウ

我おもふ山に霞のかゝりけり　〃　加悦　二蝶
鶴鳴て海一杯に霞けり　〃　芦笛
霞日や嬉しがらるゝ山法師　〃　糸英
陽炎となるまで朝の霞かな　井霞
留主勝の山家となるや花つゝじ　〃　宮津
山ざとのふところ広し朝霞　〃　起文
種売のいつきりもなし梨子の花　〃　青湖
浮雲は汐干についてなくなるか　〃　東嶺
正月の心で居るや初ざくら　〃　夷白
呂風
二七才

つつじでも折気に成ば夕暮る　〃　万籟
山吹の色うしなふな雨ひと夜　〃　巴明
花の夜の一つばなしや越の雪　〃　馬良

鐙にもせち備るや梅の華　丹波亀山野楊
灯に眼のはなされぬ桜か（ママ）哉　〃　笹山　松美
連翹や塵はきよせし門の隅　〃　三輪　宜春
浪音の遠き一日や花の散　〃　上林　多實
匂ふらめ松のこけらの花の香の　〃　須知　巴流

二七オ

漣か雲にとゞきてちる桜　〃　郁良
火打かる花見の客や渡し守　〃　呑曇
誰人の仕業ぞ花に割狭み　〃　貝士
しづかなる桜ににじむ宵の月　〃　古瓢
我も花見るも花也よしの山　〃　枝雀
烏啼ば花が減かと思ふなり　〃　魚屑
花散て花守ひとり老にけり　〃　車丸
鶯のほつとして居る野風哉　〃　大山東眉
親子して檜原見やるや春の雨　〃　梧朗

二八才

昼過や羽おりたゝめば蝶の来ル　〃　白路
春の夜の永かれとこそ思ひける　〃　杜高
一雨のまだ乾かぬに雉子の声　〃　武陵
菜の花の果は日和に曇りけり　〃　氷上眠虎
花咲て心世話しき天気哉　〃　夏皐
春風のおもふさま吹野山哉　〃　関斧
翌の日を残して帰るさくら哉　〃　呉潮
梅に三月心通ふや春の月　〃　漢二
あのやうに人の行のは桜かな　〃　架橋

二八ウ

ふは／＼と雁の羽音や朧月　　丶　南樹
寒食や我はおかしき花の庵　　丶　春抄
暮兼て立かねて雁の名残哉　　タジマ松居
春立ものゝ退屈もなし山ざくら　　タンゴ無楽

捨がたき日和と成ぬ梅やなぎ　　杜高
草鞋かろき道の陽炎　　武陵
筏くむ上まで春の崩れ来て　　梧朗
露の音さへ響く薄垣　　東眉

二九才

粟の穂のかたぶく月は出にけり　白路
　松の木箸を削る秋の夜　高陵
傘を畳て覗く海士が軒　朗
　独りごとする唖のかはゆき　眉
馬の尾のぬれ／＼しきを結び上　路
　卯の花折て眼を覚しぬる　高
梅干の酢にも匂ひと契りしか　陵
　羽織の袖の墨に汚るゝ　朗
月早き江の大浪の押かゝり

二九ウ

芒畠を人にあづける　眉路
木啄にとられし夢は何とやら
簾のへりをつとふ雨漏　高陵
咲華にしばしと申初瀬の町
酔て世話やく古猫の恋　朗

人声のあれば光るや春の水　大坂星譜
鶯は喰はぬ鳥也春の鮎　〃　天籟
行春に□ひく声の聞へけり　〃　鶴里

三〇オ

座撰（ママ）に足る事しらぬ桜哉　丶　其鳥
雨ふれば雨の人来て春の山　丶　二鶴
宵と夜の間の花に心あり　丶　宝鼎
朝ばれや柳一木に家二軒　丶　北亭
淀川もよどむ計に霞けり　丶　寄松
出日和や花なき里も朧にて　丶　籬蜂
花の香も人に交りて腥き　丶　樽雄
朝風の替りぐち也初ざくら　丶　吐雲
横雲の一当あたる桜かな　丶尼　冬色

三〇ウ

華に見られ旅する人は何事ぞ　丶　几仙
行春を草臥顔の柳かな　丶　士竹
人並の人に生れて花の陰　丶　月巣
見て居ても手先の寒き薺哉　丶　三四坊

初ざくらおとつひからの暖さ哉　河内星田峰輔
花で夜の行届たるよし野哉　丶　雪丸
けふあげし棟の寒さよ春の月　丶　魯秋
花守に散て見せけり山ざくら　丶　秦村貴染

三一オ

桜から誉て這入し家見客　　丶高田馬笑

よし野にて

蝶鳥の羽をもそゝげよ苔清水　　丶郡門古光

夢にすむとこが爰らか飛小蝶　　大和三輪歌鳥

ちらちらと畑戻りや春の暮　　伊勢津　芙蓉

松原はあとに成けり朧月　　丶亀山　其阜

菜の花に東寺の塔の移りけり　　丶玉垣　春車

山ざくら覚悟なき日の盛哉　　丶川崎　暁浦

三一ウ

道形りに蛇の出たる春日哉　丶稲生玉井
行雁や月は残して□□ケ関　丶　二蝶
散花に杯ひろふあしたかな　丶　朝水
ちる華の花に驚く散日哉　丶　志完
隙明の絶し桜にきふもまた　丶上野紫酉
風の柳昼も朧の風情有り　丶鼓ケ浦斗口
梅咲て低き月夜と思ひけり　丶　月喬
遠近の人ゆらつかす桜かな　丶　笋村
　あらし山にて
五器もたぬ乞食と思へ山桜　丶大塚烏翠
　三二オ

花鳥といふ鳥も来ぬよき日哉　　丶久居蘭山
下陰も風情に花の山桜　　丶　来居

何といふ神かはしらず花の陰　尾張名古屋杜堂
塩竈は南むき也花菫　　丶　平斎
あら磯や松は花にて打霞　　丶　月釣
春雨や折ふし寒き松の上　　丶宮　鱸亭
咲華に大切がらす日和哉　　丶布袋花央
花守やはづかしがらぬ己が年　　丶　柏台

三二ウ

道ばたで薪する也ちる桜　丶　里頂
二人居れば莚ちいさき花見哉　丶　其培
一日は笠によごるゝさくら哉　丶　停立
散花や家鴨の多き下屋敷　丶　閑里
山ざくら人の心をくらべけり　丶　重陽
藪越に曇かけたる桜かな　丶　不残
花の香や二間に客を立籠ル　丶　頭言
耳遠になるや吉野の花曇　丶　桂芝
散花によし野の衆の花見哉　丶　雨耕

三三才

鸚鵡よくものいふあたり初桜　丶琵琶島足彦

谷底の小橋も花の渡り哉　丶　多陀寸

華守る人こそ心あるならめ　丶　路郭

木兔のふりむく方や春の月　丶玉野　風蕉

垣越に返すや梅のかり階子　三河吉田三岳

宵闇の軒にかぶさる桜かな　丶　木芽

山の井にふたする音や朧月　蒼虬

三三ウ

木の葉に残る雪のかたまり　三岳
鶴つかひ爆竹の跡のもの食て　千崖
ぬぎし烏帽子の置所なき　茂椎
あらし吹すだれの外の車百合　岳
埋木を見に人のよる朝　虬

むつくりと鷺の居る日や初霞　甲州　如翠
田の水のかしこく落ぬ初蛙　〃　淇海
野鼠の尻もかくさず花すみれ　〃　潮水

三四オ

しら梅の散過したる日和かな　〃　玉視
鶯に寝処見せて仕舞けり　〃　岱呂
春の夜や酢を買にやる裏の道　〃　一作
磯馴松子の日もまたで霞けり　〃　蛙文
どちらから見ても花守男かな　〃　箕由
鶯の足踏延す日南かな　〃　久狐
色に香に只うらやまし梅の花　〃　真貫
淡雪の降あつまるや諏訪の湖　〃　有斐

三四ウ

春の月人うるはしく成にけり　江戸　白芹
梅早き兼言あてし野の小家　〃　鷺雪
かげろふや礫うたるゝ野ゝ烏　〃　無三
藪かげや杖折ルおとも花盛　〃　素玩
あけぼのや杉菜に濡る雉子の腹　青梅　来夕
戻らんとすれば桜の月夜かな　金沢　万岳
咲花のいづくはあれど東山　扇町屋　紫雄里

咲花に思へば長き命かな　房州藤原一松

」（35才）

別るゝに近き声也天津雁　下総左原　惟平
花守の宿はひとつの小鍋哉　〃　柏二
一日の陽炎ちるや雨障子　〃　角米
大根堀手にもかゝるか春の雨　〃　松林
水底に声ある月の蛙哉　〃結城　大梁
摘草やものゝゆかしき都人　〃　準虎
さまでなき山も霞ぬ花心　〃　晛斎

【注】月明・中七「山も霞のは」。

粥腹の機嫌も軽し薄霞　常陸帆津倉有美

三五ウ

旅人の村雨しのぐ椿かな　上毛伊せ崎紅碩
小屋敷の一本つゝじ咲にけり　〃
鶯や大事そふなる朝の声　〃　車隣
かげろふや乗もの揃ふ奥女中　〃　広水
行雁や山のうへなる星一つ　〃　才枝
大空に映ふものはさくらかな　〃　新波此教
花守も寝ておはせしや鶯の声　〃　桐生しげり

闇き夜はとてもくらかれ弥生尽　奥三春朴斎
三六才

どこらまで梅引ずるよ門の水　〃仙台　威鶴
海苔柴や月の湧出る鼻の先　〃　南宮
桜見る日数は春に似もやらず　〃　亀婦
どの雲に競て見ても花の雲　〃　琴松
馬呵るやつも柳の木の間哉　行脚　真澄
焚ざりし灰ふむ雉子の夜明哉　〃会づ　如髪
春おしむ人又来たり草の庵　〃青森　花得
花の山や心にかゝる斧の音　〃末松山彩雅
あけぼのは人の薬よ春の海　〃外ヶ浜白珂

二六ウ

里の夜や余所の桜のあかるくて　出羽米沢潮翠
梅に鳥声せぬうちの頼もしき　〃　最上亀年
しら梅や鳥の泊る枝もなし　〃　楓二

若草や雨の催ひもつい降らず　南部山田卓堂
山越すや又ひと明り遅ざくら　〃五ノ戸三豆

生れより育つ処の柳かな　越后仙田二川
春もやゝ雨しみて昼も帰る雁　〃与板　悟明
三七才

春の夜や旅人に酒を振まはれ　〃今町　烏交
雁啼や都は竹の朧月　〃　方穀
わが母の心栄也夕ざくら　〃　春歩
山ひとつ川一筋や雉子の声　〃岡野町梅泉
あけぼのや雲より上に春の水　〃　菫水
桃の花矢取が袖に散にけり　〃　霞暁
大寺や藪にして置赤椿　〃荒井　旭浪
うつら／＼ひとり歩行や春の月　五禽
花の山定まる道はなかりけり　桂児

三七ウ

おさずとも明べき花の戸口哉　信州吉田何丸
一枝も木ぶり直さぬ柳かな　丶伊奈林風子

若草や蜑が釣瓶の置処　飛州マシタ方斎
出ル月を目当に行ば柳哉　丶八鹿　雨荻
花菫終に草屋へたどりつく　丶高山　儲史

もろともに月も夜に入さくら哉　越中水橋文器
針魚のぬらりひらりと春日哉　丶島　醜文

三八オ

行違ふ人のたもとやはな雪吹　〃魚津宇玄
此山に住なれてこそ花に鳥　〃　享
川音について桜のありどころ　〃　東畝
春の夜はすべてなつかし梅の花　富山　乙丸
山吹に明てある也裏の門　〃　花桂
花の夜や塩鳥匂ふ湯吸物　〃　蚊国
咲花の是から奈良の地也けり　〃　霜苔
蝶一つ藪から出たり雨上り　〃　乙峰
あたらしい家が出来たり野の燕　〃　烏休

三八ウ

初華にあげる鋏か磯の蟹　　〃　宇井

叩ても起ぬ男よ雉子のこゑ　　能登宇土津桃切

旅立に隣を誘ふ弥生哉　　〃　如蘭

鶯や小枝に一夜あかしたる　　〃　声戸

一日に延るものかはつく／〻／〻し　　〃　晩成

遠のけば花のふへたる桜かな　　〃　挙嵐

鶯の通ふ道也□木はら　　〃　錦川王史

鶯の辷りそふなる槻かな　　〃　三階李青

三九才

霞む瀬は立戻りても渡るべし　加賀金沢年緒
ある時は鐘につく也田の蛙　〃　固来
吹よせて蝶ともなるかうつせ貝　〃　嵐眺
園広く勝れても見し梅の月　〃　一立
柴の戸や豆腐買にも菫踏　〃　歩兵
初蝶や先へ立なら伏見迄　〃　雪貢
里寺や外トで米搗暮の春　〃　一慶
蓬生の宿や燕も寝に戻る　〃高松　自明

三九ウ

春の夜や声かけて見る灘の船　若さ小浜雲居
草の名を付んとすれば忘霜　〃　くら

蓑虫の朝日に逢り梅の花　江州水口唇州
川越に我家の見ゆる柳かな　〃彦根　素律
貝売にとりつく磯の霞かな　〃　保貫
しばらくも寝ては居られず花盛　〃　飛川
行春に連立大和めぐりかな　〃市子　芦柴
武士やいやしからざる花の陰　〃下田　車露

四〇オ

参宮してもどりし人に　丶辻村　忍雪
七日あまり花に寝て来し噺せよ　丶少年　金爪
弓さげて戻る道也梅の花　丶日野　士明
春風の吹草臥し平地かな　丶　甫一
鳥の毛の足にまとふや春の風　丶如来　何楽
春寒や鳥羽の水田の夕明り　丶サツマ如蒿
蛙ともならぬもの也水の沫　丶大クボ如圭
春の海島高く成低う成　丶平ツカ梅翁
苗代の水に浮けり稲荷山　丶坂田　梅園
花の陰人さま／〃＼に転び居ル　四〇ウ

旅籠食て二日も居たり春の雨　西湖太田乙鶴
草笛を吹や朧の小柴垣　〃大ミゾ蕪巾
若草や志賀の小家の鶏の声　〃　素眠
鶯の菜摘呼出す木間哉　〃音羽田美
春の夜や足にかゝりし藻塩草　カタ〃馬当

伏見にて

【注】月明・肩書「カタ」。

きり出す計も桃のさかり哉　〃　文常
華の宿翌行山の道もみゆ　大津　石鹿
蝶起よ湖は夜が明てある　〃　古猿

奈良にて

かげろふや遊びほうけし鹿の顔　〃宇洋　四一オ

浅川の一夜めぐるや山ざくら　洛百池

【注】月明・中七「一夜もくるや」。

花守が来る足音か麦に風　金菜

咲花のまぎれ込たる夕べ哉　双南

西山やはれ行花の星一つ　魯竹

正直に詠るうちぞ朝ざくら　三夜

若草や手拭白き野べの人　二峰

鮎汲の笠かつぎたる背中哉　芹坡

山吹や心やすくも歩行所　其楽

只居ても戸明ぬ寺の椿かな　泉柳

四一ウ

花の散あしたを旅寝心哉　車鳴
春おしといふては只に暮しけり　桃窠
何の木もあたりになくて柳哉　帋美
咲といふ日ははや老ぬ庵の花　陶居
散くせのなき様子也朝桜　白糸
居過して眼だるく成や花に風　洛　乙彦
【注】月明・中七「成ぬ」、肩書「洛」無し。
しら壁に日はつひえけり山桜　桑居
寝るほどの木陰持けり山桜　支芹
散果るさくらの上も下リ月　梅價

四二オ

時しらぬ人といわれて花に舟　布雪
行春や隣へ落る木の雫　杜蓼
花の香の夜は小草に戻りけり　国雄
陽炎の花はさきけり糸桜　百麿
世の中が丸う見ゆるぞ花の雲　其成
春の夜や木の間のほしき四条川　茂椎
花の雨覚束なくも晴にけり　千崖
華ときけば早まぼろしの嵯峨御室　雪雄

あらし山にて

四二ウ

居るよりはや名残ある桜哉　蒼虬
　おのが弥生を往通ふ鳥　兌籟
八重霞去年の酢瓶の蓋明て　茂椎
　抱へてあがる舟の敷物　千崖
粟稗は若くて月のさたもなし　籟
　壁のいとゞのしのび音に鳴　虬
秋風の薬につかふ加茂の水　崖
　むく起に来る貝原の文　椎
十祢宜のうちにとならば子も呉ん　虬

四三才

合歓の葉ごしにみゆる砂山　籟
夕かげに板戸の反を踏付て　椎
大きな亀を仰向ておく　崖
寂しさの果もしられぬ南部領　籟
ふと眼のさめて拝む有明　虬
露に似し君が心のひよろ／＼と　崖
草のしのぶを結ぶ琴箱　椎
から車引かずば花は散まじき　虬
仏を居るかげろふの中　籟

四三ウ

豆崎は燕の飛ぬ家もなし　椎
連歌の衆の朝戻りする　崖
何事か肘のはるも小一ト月　籟
年忌／＼に松植る磯　虬
寒声にさつさと雲は走ル也　崖
うきを忘れに叩く俎板　椎
葛城の見ゆる計が雅にて　虬
罠の狐のいのちときやる　籟
命松がはぐれて居る青菜汁　椎

四四オ

湖汲んで庭樹茂らす　崖
炎天もすこしは月のひづみ出し　籟
やいら烏帽子を着てもなまるか　虬
馬の血のなま／＼したる小笠原　崖
垣根も持ぬ白髭の宮　椎
箕をかぶる人はどこへかなくなりて　虬
魚に酔たるあとの草臥　籟
青柳のやらつき懸し花の暮　椎
筏にのせる春の山かげ　崖

四四ウ

【校異】月明・四四丁裏までで終了

真直に水も流れぬ花の下　南柯
解際の冬より白し雪の山　豊杵築蝸茗
なの花をつか／＼出たり渡し守　仝　亀頂
塩がまも人も並ぶや春の月　丶　巣化
山間も苗代ごろや小風吹　信善光寺可厚
二日月見定てより朧なり　丶　叢
春寒や麦の疲葉に鴨のつく　アキ西条柴籬
鶯にあてゝ置けり竹五本　丶　玉斧
花の旅わすれて出たり庵の鍵　丶　左★
★土偏に戚
四五オ・「ヲワリ」オ

さし汐のぬくいを啼か春の雁　　林阿
夜の花しばらく月もよせ付ず　　里川
虎杖の葉にこぼれけり山桜　　奥州二本松乙調
吹風の草臥見えて蜷にしる　　湖東大塚　吾人
香を今に吹つたへてぞ花供養　　菊舎三世　其篤

四五ウ・「ヲワリ」ウ

京三条麩屋町東江入
蕉門俳諧書林　菊舎太兵衛
色紙　短冊　画半切并扇掛　短冊掛
矢立　石刻　御望次第　古本売買仕候

（白鹿・月明共に裏表紙見返し）

（裏表紙）